C 58　幼児の食生活 ー食事中の態度について ー

福岡県社会保育短大　○北村祥子　小松啓子

目的　食生活の急激な変化に伴い、学童児の食生活の乱れが指摘され、家庭科教育の中において、子どもたちをめぐる食生活のあり方が重要視されるようになってきた。ところで、食生活の乱れは、既に乳幼児期に認められるという報告もみられるようになり、今後乳幼児の望ましい食生活のあり方についても充分な検討を要すると考えられる。

そこで、今回われわれは4、5歳の幼児を対象に食事中の態度や児の食事態度に対する母親の意識度について、調査を試みた。また、嗜好と食事態度との関わりについても検討を加えたので報告する。

方法　本学附属幼稚園児（4歳児28名、5歳児28名）を対象とした。質問紙法自記により、児の母親に児の家庭における食事態度、母親のそれらに対する注意度・関心度、児の嗜好について調査を依頼した（調査時期：昭和62年6月～7月）。なお、同時期に対象幼児の幼稚園におけるお弁当時間中の態度についても観察した。

結果　家庭での食事中の様子として、家族と話をしながら、おいしそうに、楽しそうに、うれしそうに食事をしている子どもが多数を占めていた。しかし、一方では、嫌いな物を残したり、よそ見・遊び食べ、ぐずぐず・だらだら食べなどと望ましくない態度も認められた。園においても家庭と同様の傾向がみられた。母親の関心度・注意度が高い食事態度としては、よそ見・遊び食べ、テレビに夢中になって食べようとしない、ぐずぐず・だらだら食べ、嫌いな物を残す等であった。また、児の嗜好が食事態度に影響を及ぼしていることが明らかとなった。